様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年５月１５日現在

機関番号：５７５０１
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2009～2012
課題番号：２１７２０２７９
研究課題名（和文）　中世後期アイルランドの政治的変容に関する考察

研究課題名（英文）　A Study on the Political Change in the Later Medieval Ireland

研究代表者
田中　美穂（TANAKA　MIHO）
大分工業高等専門学校・一般科文系・准教授
研究者番号：40435491

研究成果の概要（和文）：12 世紀後半のアイルランドの政治的変容について、有力な現地の王ルアリー・ウア・コンホヴァル、イングランドから侵入・定住したジョン・ド・カーシーとヒュー・ド・レイシー、イングランド王ヘンリー2 世の相互関係を軸に考察した。4 年間の研究期間中に、3 冊の図書（共著ないし共訳）が刊行され、2 点の英語の論文（査読付きと査読なし）と 2 点の日本語の雑誌論文（査読なし）を発表し、海外や招待分を含めた 5 回の研究発表を実施した。

研究成果の概要（英文）：I examined the political change in the later medieval Ireland, which centers on mutual relationship between Ruaidrí Ua Conchobair, the high king of Ireland, John de Courcy, the conqueror of Ulster, Hugh de Lacy, possessor of Mide and Henry II. Three books, which I joined as a co-author or a joint translator, two English papers and two Japanese were published and I read five papers at the various congresses or forums including the international one during the period of this study (2009-2012).

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	700,000	210,000	910,000
２０１０年度	600,000	180,000	780,000
２０１１年度	600,000	180,000	780,000
２０１２年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総　計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学、西洋史
キーワード：中世史・アイルランド・ブリテン諸島

１．研究開始当初の背景

2004～2007 年度基盤研究（B）「中世ブリティッシュ・ヒストリーの可能性と射程」（研究課題番号：16320103）と 2006～2008 年度基盤研究（B）「地政学的空間の史的変容とアイルランドの周辺化・脱植民地化過程の分析」（研究課題番号：18310164）の両科研費研究に研究分担者として参加したが、そのなかで、従来自分が研究をしてきたアイルランドの中世前期の歴史だけではなく、中世後期の歴史も研究する必要があると痛感した。

当時は国内においては中世後期アイルランド史の研究そのものがあまりない状態であった。海外においても、アイルランドとブ

リテン両地域の研究者が共同で論文集を発表するなど、「ブリテン諸島史」を意識した新たな研究が見られた。このような潮流を吸収しつつ、研究を実施したいと考えた。

２．研究の目的

本研究の開始当初の目的は、「ブリテン諸島史」研究の枠組みの中で、中世後期（12 世紀後半以降）アイルランドの政治的変容について考察することであった。アイルランドの歴史は、この頃、イングランド勢力の侵入によって大きく変貌する。それまでアイルランドでは、各地域の王や王族が現地の支配層として互いに覇権を争っていたが、そこにイングランドからの侵入者とイングランド王権が加わることになる。中世後期のアイルランドは、上記の三つの権力が相互に争う三つ巴の状態になる。その政治的変容の実態を考察し、明らかにしていくことを目的とした。

３．研究の方法

(1)アイルランドおよび連合王国への研究旅行

毎年、アイルランドや連合王国を訪問した。目的は年度によって異なるが、現地の大学図書館などでの文献収集と中世の遺跡などの現地調査が中心であった。年度によっては、現地の研究者との研究打ち合わせや現地の国際学会での研究発表をおこなった。

(2)国内外の学会への参加と研究発表

所属している日本アイルランド協会や日本ケルト学会を中心に、年次大会や研究会に参加し、アイルランドやブリテン諸島に関する歴史・文学・言語学・考古学などに関する研究発表を聴き、必要に応じて発表者にコメントや質問をした。また、自分の研究発表もおこなった。フォーラムやシンポジウムでの発表を依頼されることもあった。2011 年 8 月には、アイルランドで開催された国際学会（XIV International Congress of Celtic Studies）に参加し、自身の研究発表もおこなった。

(3)図書ならびに雑誌論文の執筆活動

共著や共訳の依頼を受けて取り組んだ図書が 3 冊刊行された。また、査読付きを含む 2 点の英語論文と 2 点の日本語論文も発表された。これらの雑誌論文には依頼を受けて執筆したものもあった。

４．研究成果

(1)共著・共訳の図書 3 冊の刊行

①バーバラ・ハーヴェー編『オックスフォード　ブリテン諸島の歴史 4　12・13 世紀 1066 年－1280 年頃』の刊行

「第 4 章　教会とキリスト教的生活」の翻訳を担当しただけではなく、アイルランドに関するあらゆる事項（索引項目の解説の執筆、日本語版追加補足文献の加筆、訳注と用語解説の執筆など）も担当した。

本科研費研究課題と一致する時代があつかわれており、研究期間の大半でこの翻訳・執筆作業にも取り組むこととなった。当然、自身の研究課題とリンクする部分も多く、第 4 巻の翻訳事業に参加できた意味は非常に大きかった。

今後も、国内で中世後期のアイルランドやブリテンの歴史について、論文執筆をしたり、研究発表をしたりする際、第 4 巻が刊行されているのとされていないのとでは大きく異なる。刊行後は、この巻を引用文献や参考文献として大いに活用できるので、執筆や発表もしやすくなる。

②トマス・チャールズ＝エドワーズ編『オックスフォード　ブリテン諸島の歴史 2　ポスト・ローマ』の刊行

中世初期ブリテン諸島の歴史が、各地域を専門とする研究者によって執筆された文献の翻訳書である。「第 5 章　ラテン語と現地語：二言語テキスト文化の創造」を共訳した。日本の読者にはなじみがない事柄も多く、それゆえ、日本語版には、索引の各項目に詳細な解説が加えられ、日本語版追加補足文献が挙げられ、訳注や用語解説も加筆された。

このシリーズの各巻は、単なる翻訳書ではなく、各時代の「ブリテン諸島史」の総合案内書としての役割も果たす。とくに本邦において知られていない、まとまった研究も皆無であった中世初期の文献が刊行された意義は大きい。

③下楠昌哉（責任編集）の『イギリス文化入門』の刊行

この書籍は、大学生向けの教科書として企画されたものであり、従来の見解の見直しや最新の研究成果の紹介も随所に織り込まれている。言語、自然環境、歴史、文学、音楽、メディア、美術、スポーツ、教育、階層、王室、政治など多種多様なテーマが取り上げられており、非常に中身の濃い内容になっている。

「第 5 章　イギリスの宗教と生活」を執筆したが、ブリテン島へのキリスト教普及におけるアイルランドの役割の大きさなど、中世アイルランド史を専門とする者の立場から執筆できた点は大きい。また、執筆の際には、ユダヤ教やイスラームなどの他の宗教や、ウェールズ・スコットランド・北アイルランドといったイングランド以外の地域についても記述し、ブリテン諸島の多様性を尊重するように心がけた。

(2)論文の発表

①“Ruaidrí Ua Conchobair: the Last High King of Ireland”（査読付き）の発表

イングランド勢力の介入や侵入が始まった 12 世紀後半のアイルランドで、もっとも有力であった王ルアリー・ウア・コンホヴァルについて、彼の生涯をたどりつつ、とくにイングランド王ヘンリー2 世との関係を中心に論じた。

ブリテン諸島で著名な研究者が査読者であった。また、この論文をまとめる際にも、同時代のアイルランド史研究の第一人者であるベルファスト大学のフラナガン教授の助言を得た。フラナガン教授とは、研究旅行の際に研究室や自宅を訪ねては親交を深めている。自身の研究についても的確なアドバイスや教えを受けている。

英語論文の一番の利点は、世界中の研究者にも読んでもらえることにある。海外の研究者たちと交流する際、今自分がおこなっている研究についての名刺代わりとして、この論文を紹介することができる。

②“‘Nation’ Consciousness in Medieval Ireland ”（査読なし）の発表

同じく英語で、中世アイルランドにおける「ネイション」意識の変遷について論じた。アイルランドでは、7 世紀から現地で多様な文献が書かれるようになるが、その時期の文献に見られる「ネイション」意識、9 世紀以降のヴァイキング期に見られる意識、12 世紀後半以降のイングランド勢力侵入時に見られる意識をそれぞれ検討し、比較して論じた。

12 世紀後半以降のアイルランドの政治的変化を研究するためにも、前段階としての 7 世紀や 9 世紀の歴史と比較することは有益であった。

③「アイルランドとヴァイキング」（査読なし）の発表

2010 年 3 月に東北学院大学オープン・リサーチ・センターで開催された公開シンポジウム「北海からアイリッシュ海へ――ヴァイキングの軌跡――」にコメンテイターとして招待を受けた。その時の研究発表の内容をまとめた論文である。

アイルランドでは 9 世紀以降にヴァイキングの侵入や定住を経験するが、12 世紀後半以降のイングランド勢力の侵入・定住と比較して、研究の面でも観光産業の面でも、ヴァイキングの方は好意的に受け止められているように感じる。中世に侵入してきた両民族に対するアイルランド共和国の人々の国民感情のあり方についても、シンポジウムでの発表や論文執筆を通じて、改めて気づかされた。

この論文は、日本で初めて、ヴァイキングのアイルランドにおける活動、ならびにアイルランドでのヴァイキング期の研究についてあつかったものである。アイルランドについては、国内でのヴァイキング期研究において抜けていた地域であり、この論文はそれを補うものである。また、ヴァイキング期のアイルランドの研究は、今後さらなる発展が求められるテーマでもある・

(3)学会での研究発表

①「アイルランドとキリスト教：中世後期アイルランドの世俗権力者たちと修道院」の発表

②と同じ時期に②と関連した内容の発表を異なる学会でおこなった。②の発表内容を前提とし、ルアリー・ウア・コンホヴァルとコナハトの修道院・教会、ジョン・ド・カーシーとアルスターの修道院・教会、ヒュー・ド・レイシーとレンスターの修道院・教会、世俗権力者たちそれぞれの教会政策に焦点を当てた。

ジョン・ド・カーシーの場合は、アルスターに次々と修道院を建設したが、それらを自身の出身地であるイングランド北部の修道院に従属する娘修道院として位置づけた。

ヒュー・ド・レイシーにいたっては、自身の一族が創建したウェールズのサンソニー・プリマ修道院の娘修道院をレンスターに建てただけではなく、アイルランドで自身が得た土地を、サンソニー・プリマ修道院の所領として、破壊された同修道院再建のために活用していた。侵入者たちは、出身地の修道院の娘修道院をアイルランドに創建したのであった。

②同様、①の研究発表の内容についても論文を執筆し、②とは異なる学術雑誌に投稿することを計画している。イングランド勢力侵入後のアイルランドについて、個々の事例を具体的に取り上げて世俗権力者たちの教会政策を論じた文献はまだなく、論文が掲載されれば、②ともども本邦の西洋中世史研究に、とりわけ本邦での「ブリテン諸島史」研究発展のための一助となるであろう。

②「中世後期アイルランドの政治的変容に関する一考察」の発表

研究期間の最終年度に学会で発表した。12 世紀後半のアイルランドが、イングランド勢力の侵入によってどのように変わったのかについて論じた。具体的には「最後の上王（ハイ・キング）」と呼ばれたコナハト王ルアリー・ウア・コンホヴァル、「アルスターの征服者」ジョン・ド・カーシー、イングランド王ヘンリー2 世によってアイルランドの中心部ミデに広大な領土を与えられたヒュー・ド・レイシー、彼ら三人の政治的関わりについて、彼らの子孫も含めて考察した。

ルアリー・ウア・コンホヴァル以外は侵入

者であるが、ヒュー・ド・レイシーはルアリーの娘と結婚するなど、早くも現地の王と侵入者との同盟関係が認められた。また、イングランド王の許可を得ずしてアルスターを侵攻したジョン・ド・カーシーと、イングランド王によってミデの支配者となったヒューのように、侵入者の立場もさまざまであった。

個々の事例を見ていくことによって、単なる先住民と侵入者との対立に収まらない複雑な政治的変化が認められた。発表した内容について論文を執筆し、学術雑誌への投稿を計画している。中世後期アイルランドについての学術論文は、本邦ではほとんどない。とくにイングランド侵入後の政治状況の変化について、最新の研究動向をふまえた上で詳細に論じたものはない。したがって、論文が掲載されれば、本邦の西洋中世史研究において新たなテーマや展望を寄与することとなであろう。

③“A Comparative History between Ireland and Japan in the Middle Ages” の発表

国際学会（XIV International Congress of Celtic Studies）にて報告した。同じ島国の日本とアイルランド、それぞれのユーラシア大陸との関わりを、とくに 12 世紀後半のアイルランドへのイングランド人の侵入と、13 世紀後半の蒙古襲来について比較しつつ論じた。12 世紀後半のイングランド勢力の侵入について、いわば世界史的な、グローバルな視点からとらえ直すことが目的であった。

古代から中世初期にかけて、ユーラシア大陸から宗教・文字・学問などが伝わり、それらを吸収してきたことは日本もアイルランドも変わらない。そのような歴史的背景があるなかで、両者とも本格的な他民族の侵入を経験したが、他民族に定住されたアイルランドと他民族の定住を退けた日本、その結果は大きく異なった。

ドイツ人やロシア人の研究者が質問をしてくれたり、好意的なコメントをくれたりした。いささか大胆で無謀な試みではあったが、日本人にしかできないかもしれないような新しい視点で歴史の一端を論じることができた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）
①田中美穂, “Ruaidrí Ua Conchobair: the Last High King of Ireland”, *The Haskins Society Journal Japan*, 査読有、vol. 4, June 2011, pp. 39-44.
②田中美穂, “‘Nation’ Consciousness in Medieval Ireland”, *Journal of International Economic Studies*, 査読なし、The Institute of Comparative Economic Studies, Hosei University, No. 24, 2010, pp. 3-16.
③田中美穂、「アイルランドとヴァイキング」（査読なし）、東北学院大学オープン・リサーチ・センター『ヨーロピアン・グローバリゼーションと諸文化圏の変容　研究プロジェクト報告書Ⅲ』、査読なし、2010 年、100～110 頁。

〔学会発表〕（計５件）
①田中美穂、「アイルランドとキリスト教：中世後期アイルランドの世俗権力者たちと修道院」、日本アイルランド協会・2012 年度年次大会、2012 年 11 月 25 日、滋賀大学。
②田中美穂、「中世後期アイルランドの政治的変容に関する一考察」、日本ケルト学会・第 32 回研究大会、2012 年 10 月 7 日、鹿児島大学。
③田中美穂, “A Comparative History between Ireland and Japan in the Middle Ages”, XIV International Congress of Celtic Studies, 2011 年 8 月 1 日、アイルランド国立大学メイヌース校、アイルランド共和国。

〔図書〕（計３件）
①田中美穂（共訳），他、慶應義塾大学出版会、バーバラ・ハーヴェー編『オックスフォード　ブリテン諸島の歴史 4　12・13 世紀 1066 年—1280 年頃』、2012 年、169～210 頁。
②田中美穂（共訳），他、慶應義塾大学出版会、トマス・チャールズ＝エドワーズ編『オックスフォード　ブリテン諸島の歴史 2　ポスト・ローマ』、2010 年、243～278 頁。
③田中美穂（共著），他、三修社、下楠昌哉（責任編集）『イギリス文化入門』、2010 年、130～150 頁。

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：

番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
田中美穂（TANAKA MIHO）
大分工業高等専門学校・一般関文系・准教授
研究者番号：40435491

(2)研究分担者　　なし
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者　　なし
（　　）

研究者番号：